

十訓抄

五
可憐
可存



與善人居如入芝蘭之室久而自芳也
與惡人居如入鮑魚之肆久而自頹也

やうらう又或まうは人乃を水の入物よりまうらうが
どく入物ちとまれの即ちまう田ま終バ即ち
わらわの朋友まをま何ぞまま不探しうまうらう又
九条般遺識にはまあまあね乃人ま付まうま
と教はつううれいらまらうたうらうま友ま
其よく其人を探ま董菹器と異まままやま
花のりふままけとらまの月のおま一夜はうま
はまあまらまらまひりまのまあま出ま物ま

まぶくま友のままはまはまはま徳ま
勢くまわまらま人ままま付芝蘭ま信ま口人乃
翁竹林ま筆ま七賢教はままのままま
けわ子猷の夜の月ふわがれてけらる刻縣乃
安道と君の劉慎の清風朗月ま玄夜のまらま
恨まらまはまふまま友のまままはまら
曲宴も物ままらまらまらま梁れ孝王郵枚こ
関えま二のれまらまら免蘭乃遊ままら
まら晋乃仲尼の子路まらまらまらまら
まらまらまらまらまら物まらまら



もり清和九年の皇子貞真親王の作まらける

鄒枚散後平臺静 空遣春風只断腸

文選第二十一魏文帝與吳質書云

昔伯牙絕弦於鍾期仲尼覆醢於子路

知音之難遇傷門人之無遠也

一河魚漢書才七男之在亡靈延長八年之頃寬平は皇乃

宮人いせいに託して我在世の河殺す公事と云らばよきそ

若衆くまろと受るゆりされど終はけ空勅各中てその

事あり七箇ちふして詔誦しうぶと終き終り陽秋かえん文

紀在昌長谷雄録る作らる

朕昔為握符之尊，卿亦為和養之佐，合體之儀，重於曩時，滅罪之謀，須迴於今日。
二村と帝延喜のしと終くは枇杷大納之延光卿朝夕
急患をもく清くく之の色紙一生わと終いより死成表
乃は母清延喜終りしと終く

月、轉日、幸雖相別、溫意清涼、昔至誠
况、率家高、歸内院、如今於彼、語卿名
大納言夢覺て驚多、是私和一身
再拜聖顏、一寢程、恩言芳、處奏中情
夢中如覺夢中事、雖盡一生、豈早驚

被小孫小河が祈りあり

思ひわたりや人のとけとあそびはけりしと
三後之後未推東宮してわたりゆりし時、日野多々孫資業の子
位位困り極りし、延喜錢別の名、錢情を終く
別、民繼作、其崇、詠、莫忘、多、年、風、月、遊
此意ハ毛詩云孔子曰其崇莫代邵伯之而下而也
之、心、幸、也、又、心、幸、也
けりしとわたりし、延喜孫資業の子、延喜あはれりしと
あはれりしとわたりし、延喜孫資業の子、延喜あはれりしと
あはれりしとわたりし、延喜孫資業の子、延喜あはれりしと

④楞嚴院の惠心僧都と園城寺の阿闍梨が
しは遷化と告げまじう契く奉月紙さうりふ孝祐
後夜のゆいさまとて縁よゆく園城寺供下ゆい
うう洞室より芳さあゆいあうとて絶るるあうとて
我見極樂久住菩薩 化縁已盡還生極樂
やんたの阿闍梨の中とてあうとて地よ横川の傍
都のりく人常心より使うとて傍於此時失ふい
ううりとうう

⑤興福寺の智光頼之の一雙のあはれ人をとて一
字問ふて智光あはれが頼之あはれはうり智光其

け命あはれんと頼之夢中に極あはれとて頼之が先
まう生るるあはれとてあはれとて其様を後う書
ううあはれ智光が曼陀羅とて世に傳へたり
⑥中心大衆とてあはれとて人常相成頼之あはれ常
あはれのあはれけりうが宰相あはれとて道のあはれとてあ
あはれてあはれあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
あまといふ者の物よのあはれとて使とてあはれのあ
あはれとてあはれあはれとてあはれのあはれとてあはれ
あはれとてあはれあはれとてあはれのあはれとてあはれ
あはれとてあはれあはれとてあはれのあはれとてあはれ
あはれとてあはれあはれとてあはれのあはれとてあはれ

うこに候まいぐるふ宰相入道の行々をしりかた
候はくよべい事ありといふ中もさうりくればわや
しやゆめいしくとこせらるみらきり事ありあて是
ありそえまわれとげらりありきり事ありつら障子の
ありはまぐらふふちららるるり障子とらふの
入道みくろりり知てとあ上生の大事ありふおき
すまいらくはしめくこせといふれくろり又宰相
みらんとてあせ知仕のきくすまいらまあり
あつとこせせのこめいり

七 伯牙鍾子期といふの琴友也鍾子くたてらて

美母くれい今に部より琴の音はあつんとて其弦
とらぐりていりざりくろりり文選は文冊也
元稹と樂天といは詩の友とてわくそいぐ元稹くろ
かくやうしうの樂天其作らりし詩ども紙三十卷
集て唐の太教院の経蔵にぞ巻くろりる遺文三
十抽軸の金玉声龍門原上土埋骨不埋名とい是
をうけつる也
樂天又或文の友といふもくろり詩よ云

交情鄭重金相似 詩顔清一鏘玉不如
後より佳友の交何より面白くろり院家の南北に

坂も不福^{ふふく}貪^{あま}ん^ん死^しぞう^う何^{なに}東^{あづま}と契^{ちぎ}ん^ん五^ご母^ぼが
 子^こ成^{なり}ふ^ふゆ^ゆへ^へ隣^{となり}と^と三^{さん}度^ど中^{ちゆう}で^で久^く々^くも^も友^{とも}と^とふ^ふ
 公^{こう}是^{こゝ}ま^まこ^こら^らあ^あぐ^ぐ也^や友^{とも}と^とけ^けく^く新^{にい}金^{きん}伐^{ばつ}本^{ほん}の^のら^らぞ^ぞう^う也^や
 ち^ちぞ^ぞう^うの^のわ^われ^れど^ど人^{ひと}皆^{みな}は^はさ^さる^るよ^よに^にこ^こそ^それ^れが
 ち^ちぞ^ぞう^うと^と鳥^{とり}乃^の鏡^{かがみ}よ^よ向^{むか}へ^へる^る死^し屋^やの^の新^{にい}成^{なり}ち^ちぞ^ぞう^うと^と
 と^とぶ^ぶ皆^{みな}友^{とも}と^と母^ぼと^とあ^あら^らう^う也^や佐^さ保^ぼ乃^の何^{なに}東^{あづま}れ^れち^ちぞ^ぞう^うの中^{ちゆう}
 母^ぼ友^{とも}乃^のさ^さる^る千^{せん}鳥^{てう}の^の夕^{ゆふ}ぐ^ぐれ^れれ^れを^をす^すぞ^ぞう^うこ^こそ^そを^を
 ゆ^ゆき^きさ^さる^る入^い江^え乃^の波^{なみ}と^とう^うけ^けが^があ^あめ^めを^をう^うら^らう^うと^と
 秘^ひと^と下^{した}と^とあ^あら^らう^うの^のわ^われ^れは^はら^らせ^せり^りと^とあ^あれ^れ也^や
 友^{とも}と^と母^ぼの^の不^ふ福^{ふく}ふ^ふく^くだ^だり^り明^{あき}る^るの^の浦^{うら}乃^の流^{なが}ぐ^ぐれ^れ



友とす人ともれりてさる東路乃ハ榜のさるるれ
 此これと申す中々終るをわたりて抑妹皆れさる
 いハ借老同穴のゆりありてさるるらありあまのいぢど
 らるるるるハ妻孤りしゆりハ上臈ハあまのさる
 ねぐ一次さほりハあまの孤りてさるるるるる
 さるるるるるる唐の梁伯嘗ガ妻孟光ハさる
 二をわらりてさるる終世孤のさるて霸陵ハさる入
 婦乃禮也てはさるるるるて家の貧乏をわらりてさ
 婦乃禮也てはさるるるるるるるるるるるるるるる

誠ハ其妻施南威とてはさるるるるるるるるるる
 外ハ公ありてさるるるるるるるるるるるるるる
 らん素中吟とてさるるるるるるるるるるるるるる

富家女ハ易レ嫁ニ 嫁ハ早ニ輕ニ其ハ夫
 貧家女ハ難レ嫁ニ 嫁ハ晚ニ孝ニ於ニ姑ニ

女ハ其妻とてさるるるるるるるるるるるるるる
 女ハ其妻とてさるるるるるるるるるるるるるる
 女ハ其妻とてさるるるるるるるるるるるるるる

八 淳和帝ハ淳和代ニ夏那大にゆりて律令を頒ぬと
 定るるるるるる男女乃振舞と合らありてさるるるる

植木才三郎子

石上臣四位小倉王の子

律令

右全二序...
万葉の...
洋...
り...
抄...
を...
仰...
女...
...
...
...

をじとびて信者らが男外へ移りりたる事なまむ
ふろ井ぬらうらうはしてるらんやうなわら
成なりの親おやとていづて
安積山影やすせ副たがひ新見あらた山やま井い浅あ山やま平ひら致いた克かつ
清香きやうふりもささるゆつこの井れあさくい人をささるもの
や本もとらうにけくもづもづけくあうにうらもや
きり
寛和かんわ無な文ぶん孫そん宮みやぬわくくけるふ工く役やく滝たき口くち平ひら致いた克かつ
とやといたる者ものいりあまはるく群ぐん引ひとあそとこれ
終はつりのりさうり孫そん宮みやの工く役やくの事ことりたる
⑩ 三さん重じゆう院いん皇かう女にう前ぜん斎さい宮みやと道みち雅みや三位いりあし終はつて
冷泉院才三れいぜんいんさいさん皇子みこ内うち親おや王わう 伊周いしう

世人よじん形かたちよ成なりぬもまじりてりり終はつる三位い
伸のび肉にく大おほたの湯ゆ子こされど致いたさししの似にるるにわら孫そん大おほ
まづく申まをはるまはまはるまはしやと位の湯ゆ清きよく
ぬまもあやふも関せき守まもるまじりくあうさればあまい
奇あまの中ちゆうに

名な坂さかい東あづま路ぢとてせははかしくはるぬまはるまはる
今いまて思おもへる人ひとははるまはるまはる
ゆさすれものなれがとて一ひと編ひらよりぞと進しんぶくま
わらばこれと大おほ和わ物もの倍ばいよ武ぶ藏ざう守まもる人ひと乃すなはち船ふね洞どう院いん后ご
乃すなはち女にう房ぼうよ七しちいりるがのひりさうらさうらわらりる人ひととて

と洋見^{やうけん}なるふ料^{りょう}糸^{いと}の色^{いろ}れ^れゆ^ゆづ^づら^らる^るの^のう^うも^もを^をど
 の^の糸^{いと}よ^よめ^めと^とづ^づら^らち^ちら^ら紙^しと^とこの^{この}清^{せい}徑^{けい}の^の律^{りつ}糸^{いと}に^にと^とあ
 ら^らど^ど色^{いろ}紙^しと^とあ^あら^らだ^だい^いら^らち^ちら^ら紙^しの^のゆ^ゆら^らめ^めと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 せ^せば^ばさ^さら^らぬ^ぬ紙^しの^のゆ^ゆら^らめ^めと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 ら^らあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 い^いあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 せ^せば^ばさ^さら^らぬ^ぬ紙^しの^のゆ^ゆら^らめ^めと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 ぐ^ぐれ^れい^いま^まの^のま^まを^をと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 ぐ^ぐれ^れい^いま^まの^のま^まを^をと^とあ^あら^らぶ^ぶ
 る^るり^りと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶと^とあ^あら^らぶ^ぶ

同心契愛蓮花偈 題石詞入鑲字門



書へし終るる人見しうそ及赤色紙の巻はひけ
すつとある

醍醐帝のれさせしとあつてのらるるは日藏

法隆寺の氏子の名を相承す

上人の甲午年四月十日の窟よ巻て終ひ
くつたふ八月一日午刻に死すといふ同十三
日とてよみぐるりける其間まはしめて終ひ
しあつて金剛藏王の真巧方便して三界六道
んめあましく終るるわづかに佛帝の佛座あり
つてもろろり四乃鐵の骨を相去る各各又針
其中に一の茅屋あり帝是よりわづかに人と

佛佛にて候びて近く招きしを終りて我日本國

金剛覺大王の子也あつた在位の時たむる

あり此一案の常念の大長れ事いふら候し此鉄

窟の苦所よ終るるは苦報を受事年いふ

あつと作らるるは佛身をもとらるるは苦根

の根をい主上團母よしとて佛言傳ひありする

三たつとあつた所のとらるるは佛身をもとらるるは佛身

は佛身をもとらるるは佛身をもとらるるは佛身

泣鳴咽し終るるは佛身をもとらるるは佛身

たつた冥途には貴賤を論むるをらるるは佛身

ハ似てぬへさうくろ奈良の先帝世成るさうま
 くに本意とくげとてさうてお家よ及ぶさ
 ぐろ高侍薬子のさめめさゆ中宗徳院のハまれ
 ちちらまぞけとくさみりくハ女房お掃
 依ゆくろや唐の設討因の世王乃后腹如姐こと
 てさうちたぐくむけ物とて宵々ろ瓜みさぐくけり
 知終いどさくふ電巻してうんがいつまうハさうま
 終同其國とじよくろさうぶとさ前世の契やつ
 ちちろ帝の清公をのくさうつたる例よいれ終
 了り牝雞乃朝とろハ家の家る也と云ハ是也

妙莊嚴王の邪見さうく津徳夫人の勸によつて
 悪報とらふて苦悩よさうさうい釋也めまハ
耶輸陀羅女骨名也
 聖佳夷女ハ聖公しとて世々并公退をん共
 佛果証しさう法住の苦無法証のさ
 かくらあし

願と為る事有ぐとてしてより事のわきと後よも成
多し周りとある河に其人のよくついでつる物とて合
まじも又公の引方よけくある事のあるとたにいじ
つうく又いさあざんとて此事成るやせどやと成
これいして思ひある事なれども皆人れあひかまは
けくつうぐば又なぐとあうぬやふさうふべと也
まづく人の腹をくつ何こりく制とれはつていふ
盗なる火より水はくもんその益なるべしとて
扶植とけくつておろめいさむべし君あり思ひありた
賢者相をとりけい其國乱るべし親とてせたり

とも孝子はくして志がなり其家全うるべし重
物をいれ舟よのせいもまづまづらぐぬし上下いか
とれたやどくにけくつるものあせん人れあひいゆわく
うらあれくけくつるものあせん人れあひいゆわく
陰とていさく眞が成すもまづいゆ也徳子が討の公
の法にふる事とあまぐつ偽をいれてやうとて
何曾が晋の政のおもはると謙とて家よりくつて
あつてくことあまの身あひあつてあつてあつて
ふ計とて報國の長あわらざりてあつてあつて
なり



① 楚襄王晋乃関狐とくんと孫叔敖とれと諫め
 してつく園の榆はより蟬露を飲と守後
 蟬露のたるとしてとく狐とくは蟬露又蟬をのみ
 守後より黄雀のたるとしてとく狐とくは黄雀又
 蟬露とのとくよりとく榆は本をたるとしてとく
 童子犯
 さんとする狐とくはとく童子又黄雀とのとくよりとく
 深谷後より堀株のたるとしてとく狐とくはとくして身と
 をやまると此はあよ利をのとくしてとく後
 の害
 とくしてとくとくとくとく王世のたるとしてとく
 周と責とつとく留給ぬ但周又王殿討とく人
 が

その義とあきて彼國へむしりてあつた孤竹の二子
この理をきく諫言をきくもあつたけり
付くさめり終つた是の討の公母なるふより
多國これとうじく回天授人よれ何されば後害の
詔りあつたなり

② 晋文公の文獻公のいつらみねをれて他國へ移り
終つた途中めて疲外て行よよ及ばざるまじり
介子推これをもとけく股の肉を切く供ぶらん
とつて力つてあつたのづれ後つて遂に獻公の徳
をばつたなり

③ 漢馮昭儀の元帝の侍附れ官女也園うこめく
飼給ふる態よまれて帝れ侍附らうてあつたなり
くふ昭儀これとふせいで身を任つたれ態と
どありうけり後た右より人あつたなりみど
昭儀よ扱と向うあつたなり猛獸の人と得てとく
あつたなり君うて侍附する事とあつたなり
みあつたなりあつたなり女もあつたなりあつたなり
あつたなりあつたなり我朝奈良の帝れ侍
附はつたなり身とあつたなり家女いんれと契と
あつたなりあつたなりあつたなりあつたなり

仁徳天皇皇子
 ④ 履中天皇いまだた子の清河内身（おき）の信吉（のぶき）仲皇子
 おきあゝ武を廢してた子に難波のまゝかこりし
 ち多刺（せん）碎よりして此軍と知終りどとれた武内
 大長年郡（おの）の宿祢本菟以下三人に大長年（おの）を
 つめた子に此事とすといふも井とるに終りて
 難免（なんめん）おろけける馬より多とけのせなりてあげお
 ころろふけりふ大和國多遲比路よりして始
 てさあころろち子に多とるつた子に軍平乃彼
 宮をいせとてむり我報よ内裏焼亡のけり也
 さてた子石との宮に移りてはくろて仲皇子

をおろ帝位とつて終り

⑤ 白壁皇子孫王の早いはくはせむくす乃外
 して位より終りてちろりけるふ百何の宰相（さいしやう）が
 ひいんごく深くかゝけ進ば此事と歎て身（み）に
 梵天（ぼんてん）帝釈の真像とほろりなりて終りて
 くれは吾相遠帝位より落て桓武天皇とすなり
 此像を安置のちくれ梵天寺也とほろ極をかく
 ともは終りて助よりなりてはくろとつたの末の
 ちあゝんは惜く命とけりなり
 藤武（ふじぶ）に麒麟園の功なり塞垣よりなり十九年

はのよ漢の節と失くば鄭泉の烏孫國の使者也
胡地一帯を以て二千里に亘る草干と語せざらむ
焚於朝の刺斬は頸と借し純信の沛公の身もど
くろりもろ身に恩のあらはつられ命の義よあらむ
源とつり是也

⑥ 孝仁天皇御河但馬守とつり入常世の國へ行
りつりけるが其後、帝失終るる子景行
天皇の位に即終年瑞年行けるが持て来り
九種乃香葉以下乃物成先皇の御廟小なるを
源流して云今公天よ受くける小溜水と傳ふ

竹木の河十年とつてて今天皇崩して又命と傳
奉と得くた独生とて何の益りわん天よ作
ふさげびて自ける成るる帝群はよ作を
被夢成皇仁乃陵の側つるを終るる軍
の中を君れをある命成とる類の世のばのみ
多々はむか例の稀也唐よ衛の懿公とつる
王をけらむかむして賢れた下を成バ賣
し終つて鶴をのこむ一多紅香の彩に同樂
のせく奉し終るるふ多むとの来く團成とつ
鶴君の悲成退くべとつてふせぐ人たつるは

多岐と聽云とてみるくして其肝をらるる
 土のより錢して帰つたくれば聽云の長弘演と云
 人夫は死にが腹と云はく君の肝をくみよと王
 死有とれたに死にとて世に人といふか人かして
 鳥位と踏車と極く鶴軒は業業有とい此を
 とくけらるやうにいはいふくわらうとつりもあつた
 くれいはいまき空子と位分終くさる恨くまは
 ころう終くもはくまをて利すい切くあつた
 命までを捨きんる其教ありごとく
 (七) 延喜沙代は貫之以下四人の奇伝は作ておん

集紙撰はく後又新撰集紙をいさるるごとく
 貫之一人傳言紙傳をくくろくがまをてりて
 されり延喜八年正月は土依の任よりせりて
 年ふ年上洛のくは帝先づらて崩沙の間伴序
 貫之秩罷帰日將以と獻橋山晚松結雲之教
 已結湘濱秋竹悲風之声忽坐傳勅之細言也
 堯遊ス
 せりまらり彼但毛理が公の中にいをくろざらとけり
 とも遊世くまらるるがと古乃人かをいせり
 ともめく深くろくろり

とて使をさるるふんしごりくろくろくかみ後よハ傍心
とて花山僧正遍昭とていまる

九 楊良利ハ寛平は皇の世瓜のがれとせ給付同家と
出く寛達大使とて使ののり侍よいころ和泉國
日根といふ所とてよとける

政ののり給のまはつるのねとて又とてのり
園駐院は定うせとて給く業務とて葬送中り
みアとせ此所とて子日とてあまの事とてあて
行成心くよみたり

をまわつるは昔の事一は極よとての事とてあふ

出家までいさけさたあふりあざつてはくそ

十 花山院法印中納言義懐ハ外戚權在中將惟成
ハ近侍とてとろく天下の權とてわらあつるは帝
ハその心裏とてあはれよ事とるようとて同てあ人
追くとあと乃あつて帝色み比兵より惟成ゆはより
をまわり又義懐が侍とて外戚とて重くせに
つり外人とてたりとて今又り世にあらんんが給
あふ一早く出家とてと義懐此よとてあて同く
出家とて人の教訓とてあはれびつとてあつて人のあふ
とつあ始後とてとて給定に侍てよとてあつる

見し人々言ひめりしに里にありたりとまじりて
惟成^{たけなり}は賀茂系日王^{あかち}のおく一系大踏^{おんたつ}と日
くるとりしに此帝世^{このみかど}世^よ世^よ宵^{よる}をせよとせりといふ
くれし小孫官^{こまごのつとね}敏乃^{とよの}清女^{きよめ}弘徽殿^{ひろたかどの}女^{むすめ}清とてしりしを
終^{はつ}ひくはしがかぎりなく世^よをごとく清^{きよ}りたりふとくれ
させ終^{はつ}く世^よ歎^{なげ}あさうと日^ひよのさうをむがそくサガリに
くろ栗田^{あつたの}園^の白^{しろ}の^のと殿^{との}上人^{じんの}とて^と蘇^す人^{ひと}并^{なら}み^まど^りあり
くや^く病^{びやう}り

妻子珍寶及王位 臨命終時不隨者

云々と書くもこれよりくるはゆくとけりより世^よあり

おろりてげよ此世^{このよ}の夢^{ゆめ}約^{やく}の^のか^か也^や國^{くに}の^のき^きう^う王^{わう}乃^の位^ゐは
けしと心^{こころ}合^あへ^へく^くち^ちら^ら中^{ちゆう}地^ぢ十^{じゅう}台^{たい}は^は王^{わう}位^ゐと^と控^{くわう}て^て一^{いつ}系^{けい}栗^り井^ゐ
乃^の道^{みち}よ^よく^く世^よ終^{はつ}り^りと^とて^て内^{うち}裏^ら弘^{ひろ}出^でさ^さ世^よ終^{はつ}ある^{あり}よ^よ
寛和二年^{かんわにに}六月廿三日^{ろくごくにじつ}成^{なり}り^り宵^{よる}明^{あけ}月^{つき}の^のく^くと^とま^まり^りく^くは
りしは^はご^ごつ^つふ^ふぐ^ぐや^や清^{きよ}女^め地^ぢよ^よサ^サが^がく^く終^{はつ}て^て立^たち^ちま^まと^と
ひを^を終^{はつ}る^るお^おり^りし^し村^{むら}を^を月^{つき}み^みく^くと^とく^くれ^れば^ば我^{われ}輕^{かろ}院^{いん}よ
み^みら^らぬ^ぬと^とて^て貞^{まこと}觀^み殿^{どの}の^のく^くつ^つま^まと^とより^{より}お^おり^りと^とせ^せ終^{はつ}る^る
う^う終^{はつ}り^りと^とて^て彼^か妻^{つま}戸^どを^をお^おり^り終^{はつ}り^りけ^けり^りと^とて^て栗^り田^{でん}
殿^{どの}の^の清^{きよ}終^{はつ}り^りの^のく^くは^は日^ひと^とさ^さは^はり^りとい^いふ^ふと^とん^ん取^とり^りと^と
ゆ^ゆく^く契^{せき}り^りと^とぬ^ぬと^と其^{その}夜^よに^に清^{きよ}供^{くわ}せ^せを^を終^{はつ}り^りと^とぬ^ぬ

今少帝の御事との畏れにせむして奉るる御事
 作らばしむる侍返事へはを給ひて受れぬ
 事とて今宮の御事へ思ふべしはわづらふ
 如故に考へてはるる御事
如き事の内御相信ふ事家公事
 藤原相如の栗田殿より候へり候事
 うらわらしむる御事
 夏あつて又もわづらふ事あり候へり
 此よみく候事へはるる御事
 是れ候へり候事

夏あつて又もわづらふ事あり候へり

①菅家昌泰三年九月十日の宴へ正三位乃右大臣の
 大將とて内よりの御事

君富春秋臣漸老 恩無涯岸報猶遲

此はけしむる御事へは御感の候へり候事
 今御事とて同四年正月に本院の御事へは奉る事不
 實に候へり候事
 今御事とて今御事へは御感の候へり候事
 今御事とて今御事へは御感の候へり候事
 今御事とて今御事へは御感の候へり候事

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

⑤ 源氏中將と彼の浦よとらりくは八月十五夜乃
月く如瓜下中て殿上は清遊も意くとの清物倍
しあいにさあつて

みづかきも志りまきし思もそ月乃却いらるるは
あながたしく此詩乃一句と誦して入給ぬく物の
うまらるる花枝けしきも菅家の清遠のわんを
おの年昌泰三年十月は善相公清行のまき
土とてゆくける耐彼清来と通く越人あく先見

乃わやうに事証はあつてもなれど終る事あつて
篤其あまのれ賢意社のあつて速くなりは彼
状の詞り云

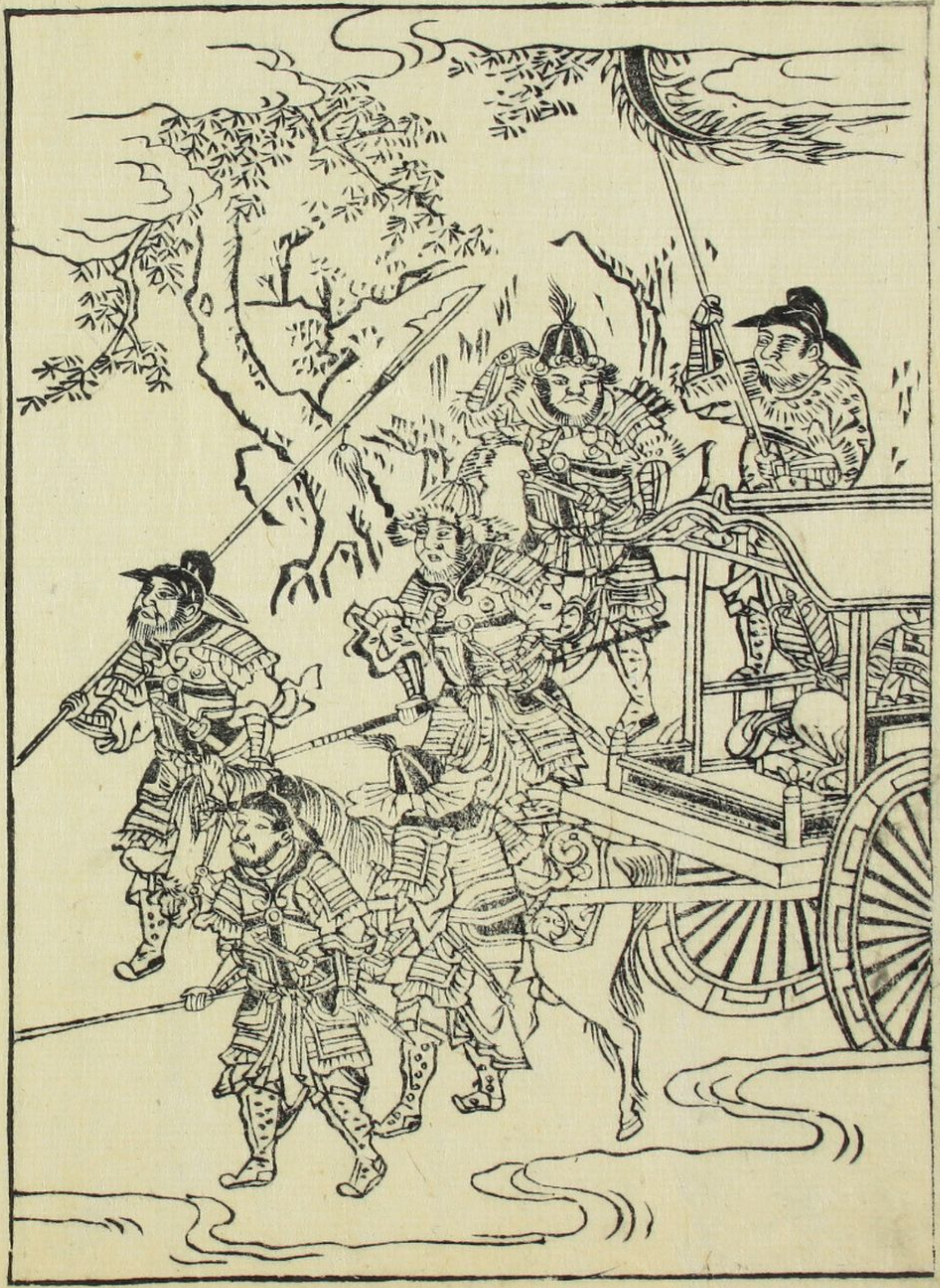
難朱之明不能視 睡上之塵 仲尼之智 不

強知 篋中物

此うれはうはるふはる事とゆわの説きみよる
罪とあつる事有るはあつてあつて

應神天皇八年丁酉夏四月小百姓の清良はあ

しめさるるあつて大長武内宿禰と筑紫へはら
くくはあつてあつてあつてあつて



武内常以天下公のそむいあり今はくくは方て三韓
 をまのき集くひそふ謀叛をくつんと天皇使と
 して大に誅をふ受り大に二公をくして
 忠公もつて君の仕方今何ぞ罪無して死ん中
 らに多し何れも其の直乃祖根子と云人あり
 が其形大に相似たり大に諸云祿がくハ報よ
 るく其罪たれ事公討り多我大にたわり
 て誅をひそ即すく外多自死と大に
 ろふ海路より朝廷より多る家に天皇兄弟二
 人を推問して大にの事者よりと知れくした寵

一 漢より被漢紀信楚の軍棠陽をのこり高祖
 小のりて革車に乗し老をよみたりは他人を
 ども何よ志すかして身にうらむ情もひくわらう
 弟をく連枝の瓊をりてけり共りんやけり
 こそ志すれよとれたの相越も昆弟より志あふ
 ハ骨肉も離歎うりとの系故是かして思ふを
 不又陳思王七步の詩云

煮豆燃其其 豆在釜中泣

本是同根生 相煎何太急

一、わらわせりつゝぬきと人こそ思ふも清補朝臣の如

階をらとりて後より又此詩よみわらわらう

梅にぬれ根よりいせぬる枝れ涙をくらん

武内大將の仁徳天皇五年丁卯薨る氣の天皇よ

了りて六代細ははく仁年二百八十三在官二百四

十四年也

⑤ 清和天皇のまじりてわらわらうゆらう何大納言

伴善男御所の賤きう相慰しをくろくそ大將と

のぞみか付ふりうのうれた大將信公とわらわ

くら成いて此人と替りしめく其代は新とんと

けりうらして子息たまひつ依り命して貞観八年国

陽子變志記二
 十九天正五年義
 中が頼父前座
 朝臣守海身
 於宗廟氏族
 自はらへ其門
 以降為其門
 無者無不取
 敬と又そり
 ぬれんことを
 あり十利物に
 空からとそり
 日本武尊の
 跡と未似る
 ね屋敷の法

かねどきとれさばどらるるや四重よえにかさるる軍
 とりも中ぶつてかみの中うちと出り中へ入事なくたり
 稲いなえのおどくと目録合らるものれく貞任まことこれを感
 して八枝やえを命とみだくゆれどくなく戦いくさ官貞任
 が軍もづつふ二百餘騎よ成りた將軍とさるる人々
 とふくと事いしれゆくのどくと相親あひまへの同將軍
 までふせまると結むすまらるるもぐらめりたれ義家よしか之任
 等ふ六騎して命と捨て四方とめぐる同貞任まこと本堪もとど
 引退ひきぞく安やすく依伯よひやく恒つね絶つたといふもの者より軍中いづれて
 ね將軍いれ行方いととらばあきらりるる歩あ兵へいどよの將軍

方亦また以も同貞任まことおのるるゆきて皆みなのどらるること経つ絶つた
 天あまく修しゆくゆれよ早はや將軍しやうに仕つかく三十餘年よとつり
 被ひ命いのちと失うしなへ何なによのぞみく我われひよりけづらばといひて
 敵たての方かたへつ希まれ入いぬ節ふし未なた二三人ふたりはわらふことぞとけり入
 多おほくは敵たてと打うちあつたつたよ打うちぬぬ者もの未なた頼たのむとらるるもの
 あり將軍しやうの行方いととらるることぞとけりく敵たての中うちに
 死しるよとて存ぞんじて被ひ命いのちぬらるるつんととらるる男おとこの男おとこ
 てわ敵たての陣ぢんへいりたかたつて頼たのむく行いるる將軍しやうに
 行いくことと思おもひつらるる思おもひつらるる將軍しやうれらるる思おもひ
 とをけりたれよは頼たのむか山やま家いつとがいつとらるる思おもひたれ

